

## 【MACF 礼拝説教要旨】

2022年1月23日

「癒しと退修」

ルカによる福音書

5:12 イエスがある町におられたとき、そこに、全身重い皮膚病にかかった人がいた。

この人はイエスを見てひれ伏し、

「主よ、御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と願った。

5:13 イエスが手を差し伸べてその人に触れ、「よろしい。清くなれ」と言われると、たちまち重い皮膚病は去った。

5:14 イエスは厳しくお命じになった。

「だれにも話してはいけない。ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めたとおりに清めの献げ物をし、人々に証明しなさい。」

5:15 しかし、イエスのうわさはますます広まったので、大勢の群衆が、教を聞いた

病気をいやしていただいたりするために、集まって来た。

5:16 だが、イエスは人里離れた所に退いて祈っておられた。

\*\*\*\*\*

1) 全身重い皮膚病にかかった人・みころなら

当時の感覚では「病気」は「罪ある者」の証拠のような理解がありました。

特に重い皮膚病の人は社会的には切り捨てられ、町の中に住めず、谷のほうに見捨てられて置かれていたようでした。

ここに出てくる重い皮膚病の人はイエス様を信頼しており、癒す力を持っており

つまり「罪を赦し、清め、結果として癒しがもたらされるにちがいない」と信じていたのです。

ただし、それは「神のみこころであるなら」実行にうつされることもしっかり自覚していました。

自分があまりに可哀想だから、あまりに大変だから助けてくださいということではなく

「神が本当に私を見捨てず、憐れんでくださるのであれば、どうぞその思いを実行して

私の罪を赦し、清めてください。」とイエス様に懇願しているのです。

2) 「触れること・言葉による命令」

5:13 イエスが手を差し伸べてその人に触れ、「よろしい。清くなれ」と言われると、たちまち重い皮膚病は去った。

イエス様は「触れること」「言葉を発すること」で癒しをもたらしました。

癒しがもたらされたというのは「神の目にかなう存在とされた」という意味を持ちました。

「主よ、触れてください」「主よ、お語りください」という願いを心にもっていることは

とても大切です。

単に「助けてください」ということではなく「触れてください」「お語りください」という

イエス様を信頼する態度が重要です。

イエス様は「触れ」「語る」ことで、この皮膚病は消えました。奇跡です。

3) 「宗教的・法的な清めは大切・・・誰にもはなしてはいけない」

イエス様はこの人に大切な戒めを与えています。

ふたつあって

まず、この出来事を他人に語ってはならない

それに、祭司のところに行って自分の体を見せ、承認してもらいなさい。

というものでした。

\*なぜ語ってはいけないのか

これはイエス様の本質的な使命、十字架にかかることで全ての人の

罪を赦し、あがないを完成させることが、癒しに集中されてしまうことで

頓挫してしまう可能性があるからでした。

十字架への道が閉ざされることこそ、深刻な問題はありません。

そのことのために、イエス様は遣わされたのですから。

癒しも奇跡も大切ですが、それがイエス様の働きのメインテーマではないのです。

イエス様のメインテーマは十字架で人間の罪をあがない、赦しをもたらす

神との和解を成立させることにありました。

癒し、奇跡が感情的に語られすぎると、そのことだけが人々の中心的興味となり

そればかりのために人が群がることになってしまうでしょう。

\*祭司に身体を見せて、癒し・清めを承認してもらいなさい

この人が社会の中で生き生きと活躍するためには、自己宣言ではなく

祭司からの承認が必要でした。イエス様は

彼がどういうふうにしたら社会の中に

復帰できるかご存じでした。私が治したのだからあとは誰に言わなくても

知られなくてもよいなどとイエス様は語りませんでした。

人に吹聴するなどは言いましたが、身体的なことについては祭司に見せて確認して

もらうようにと命じています。

現代風に理解しようとする場合、

教会や個人的に聖書の言葉で心をとらえられ、生き方が変えられたとすれば

それは教会の中でというより、社会の中でそれが認識される必要があるということ

かもしれません。

人との関係修復を土台に、自分の社会や家庭内での生き方で自分の変化が認められると

と

良いですね。

4) イエスは人里離れたところに・・・祈り

人々は、状況的に深刻で重篤な病人が癒やされた話を聞いて、イエス様のところに

集まり、イエス様に癒しを願い、それを求め、またイエス様の話を聞くためにどん

どん

集まりました。

しかし、そんな中でもイエス様は

「5:16 だが、イエスは人里離れた所に退いて祈っておられた。」

とあり、奉仕のために生きていることは間違いないのですが

自らの心の充足、心の充満のために人里離れたところに行き

祈りの時間をもつことを大切になさいました。

祈りの時間をなくしてまで、あるいは「祈りのところ」を振り捨ててまでして「他者のために生きる」ことを神様は喜ばれません。

どんなに、人に仕え、人を助けることに身を置いていても「自分と神」という向き合いの時間を確保する努力は大切です。あるいは時間の長さというより、「神様と向き合う意識」を失ってはいけないのです。

イエス様の忙しさは、おそらく本当に切迫していたと思います。

にもかかわらず、イエス様は「癒しを求める集団から退いた」のです。

自らの心を整えるための時間を間違いなく確保したということでもあると思います。

私たちは「自分の心を整える」ために時間を取れているでしょうか。

無我夢中で人のために生き、燃え尽き症候群になっても、その生き方が

正しいと考えていないでしょうか。

イエス様は、そうなさいませんでした。

イエス様は朝、あるいは夜、きまって祈りの時間をもちました。

ひとりで、父なる神と向き合う時間をとったのです。

心を探られ、心を整える時間をとったのです。

\*\*\*

もう一度、この箇所を読んで、癒やされた人の喜び、イエス様の触れ方、イエス様の心の整え方を考えてみましょう

\*\*

MACF 礼拝映像はこちらです。

[https://youtu.be/c-EM\\_d58yxo](https://youtu.be/c-EM_d58yxo)